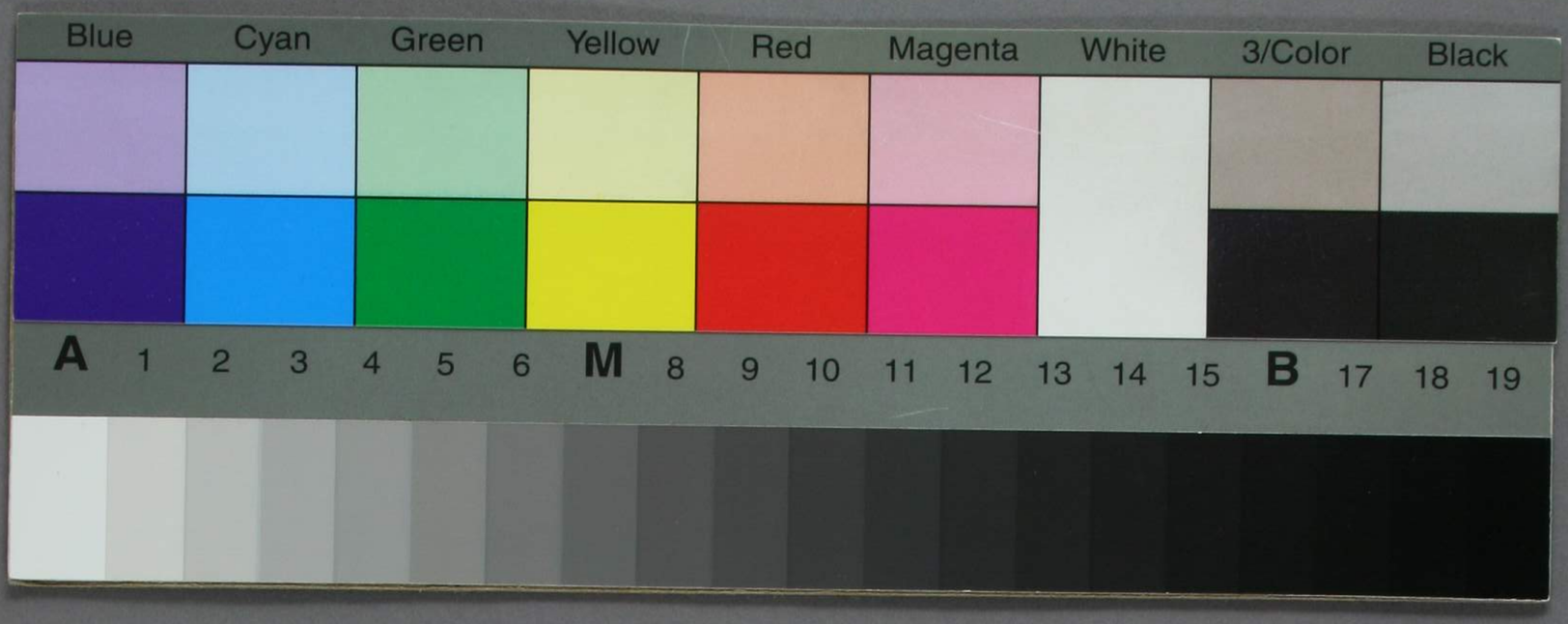

Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

2830
718

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

13
2830

鳥獸魚蟲草木
器物介科口技

腹筋逢夢石三編

山東京傳戲作
歌川豐國戲畫

文龜堂梓行

繪入讀本 全一冊

文龜堂記

腹筋逢夢石三編 序

櫻庭藏書

洗ひ髪ぐるまふ髪抜鏡よりひて。髪を抜居るとり
しまるまうくるの声あり。昔の格子今の塀。どんとうち
たてる。下女がとりつぐ口上も。高慢よりて。和國橋上
小船街角二坊の書肆。文亀堂の主人俗よびて
和國橋通小船町二丁目の本問屋伊賀屋勘右衛門
お見舞まうをと入来る。なんの用ぞとうづめれ。逢夢石乃
三編を書て呉れとのこと。聞てびつくり丸で。三番
のんざ三度目い其角をこまる扇の畫賛を書なぶら。

小首をかたふけ考るに。昔何某山人が根無草の後編に。味噌尽しの序をかきたるハ。其器量ありての支予がごとき其うハ汁を吸こゝろふわるハざれど卑下尽しこそ相応なれと。これを趣向の種となし。嬉しやさらバかゝんとて已に表紙を折返し。硯をならべ安机むかふとあぐり白髭ハ。紙撚乃髭の髭渡し。髭が似るとそ奴でごんをす。関羽や意休れミんな奴の髭宗祇さうに時雨の世にふるハ雪わり松乃胡麻塩髭梅ハみとりも種なかの中にござるが天神髭。小林の朝比奈がいろもかくしぬ鎌髭や林香なんが閻魔の髭生臭のが笑寿の髭。菱川が昔繪ハかう髭うれ髭。虎の髭。左右にあまる鬼髭や時平の大臣の怒髭。坊主小兵衛が汚り髭。ヲツト髭にも髭抚とそ高慢くされ倒あり。瓢凡で鯰の髭をおさゆるごとく。しまりなき作るれた。髭の鯔の美味もなく。髭題目のそ孫めのと。お児様方乃かつもりも。そもそ渠芉も髭仲間。鬢髭を墨にぬる。此差武者が戯作にわつるる獅子のくるひ髭。もんぶん卑下に髭をそてわるまいかくと髭尽。髭なひそうしくおやハいナア

時ハ文化七年庚午の月見月。
鉢植の蜀芩ハ。諸木の紅葉とゝ
ゆれど。引窓より四角なる月影ハ。
良夜の雨ハむ色なれば。彼江口の尼が。
月いとれ雨いさまれしる家もかく。
露や月の漏べきところよる
かく口をさみて。蚊帳のうちに灯火を
かゝげて。

山東京傳自序

目録

○蜻蛉道ハ迷て小児を呵
○雞の夫婦いさゝ
○翡翠鷺と物語
○稲光雷ハ異見
○上り甲の氣
○木奥ゝき鉦と身上話
○鶴千年まゝの昔話
○葉子雁ハ行合古郷の無叟を語る
○蜆燭の流日待の噂
○奴紙鳶の小児好

○家猪軽業の指南と望
○矮狗の口小言
○張子の木兎張子の達磨と法問
○手長蝦の年寄形氣
○庭椿の独言
○野猪味噌をめげる
○ぶゞ沙奠釣人を嘲る
○烏賊章奠と問答
○石の高麗狗ろくぞ語
○鰻鮒鰕鯰大ぶけ合

通計二十扮目録終

腹筋逢夢石三編

山東京傳戯作

蜻蛉道を迷て小兒を呵る

「ぶゞもとぜい」「ゆんまけ」「しく」。そちゐやァ乃がれ。こちゐやァ乃がゐる。トイやぜい「ゆんま」ゐちくとび。そちくとびもそ。口小云に「ゐちくしい」ゐくがさハ。そちゐや乃がれ。こちくこれで。こちゐも乃がれ。そ〜てどちに乃がゐるのぢ。きちくさァ。おれにまだ佐ノを知うとゐちくちんかこと紙いくのぢの。そぶつゐくべくスまいいさぶ。とをちァ。おまがゐ軽紙の行のうに小ちまそ。ちくとゐちまのとおりくぶぬきゐし紙ちてきちり。ゐまちのちでを奥の

あらふ。さまをして。ある水をとりて。ひとをとるとぬ。あらしこうぢ。ちろ〳〵あぶん
さるとつゆ〳〵てをとりいだす。掘のをきうるさ。おん〳〵ごとアあるとと
さげるといふをきてのあき地へきそ。もんがあそぶぞやまぬをとうア。
こうのいろうぞ。そるやそれ〳〵犬のくそぬふんづけさ。コレサあぶれ〳〵。
もぐさをでおだうてさるものう今そこいろうまあ。その犬ちうぬ
きまひれ〳〵。きまつさうこ〳〵。今そをくいくれよ。トいひさぐうワイと
さんで。のかしざれの言いあふとあり。犬が同ぬして「あうをとべエ
○雞の夫婦いきかひ　これいあいとうの犬ぶりをとる人のえのき絵もとと
あるく。遊所の日待などなどて。雞の首ぶり絵し。ぬんやアとあるこれ。
ちふのりがきてあるさいちうにそのあ房あんこでしくきるり

「おんくまさそんかだう絵ちかさるうぶきこうのくこせふ。げ〳〵ぶんろ
まるいよう〳〵ぶぜ〳〵。トいぐあやをうふあうてあるん。ふりのうり「ぬんの
こぐををもいふをせきこ。そんをふいのあいうん。ぬんがをれでをるのぐ。
うつちあうておけく「女房」「のぐおやアれくるそんあだうかこうぬ
ちをうつてげぐぶんがまるいうる。トいをそ〳〵「おうん。小ぐをうがやうそうの
とをあのづきんまでりちだしてきるをうとの「ぬれさうろ。はぬ帯と
をうふしたあんぐぬ。ぬうさ角ぐわうてぐをうん「女わう「どううまぐく
をそ〳〵〳〵二りのんあぐつて。こをしく〳〵とふうぬめうあそ。ひ屋もうれで
仁兵衛〳〵ぐをくとわしおとぬをさるとあうてぐそ。そうてまうちうがかいを
まで。たしぐをでふ〳〵とおぬをうてうの。だうしいおうんの新とまんるをん

雞

京傳

蜻蛉

翡翠

めろーとうのまうぐ「べーびーあるそのてーぶるぐるーぷ」とゆうて
かみ紙をまるのべたかういのかみ紙をゆうとまるて毎日く二かいく
わりいてとくくけいこ紙をてーぶるぐやーわんぱーぐ用れもわんぐ紙が
めろーとうと見えるそれをやーわんゆうとうの者人ようてさ
いこ」ふさめがれらーしてわてーぐさるさいとうはいのに」と
とうそふかさめへらいしてゆぶ礼とうをもてわんう「おかあ」「おとう」
いかげんにだ紙つ」かせるめろーとうの男ぐうが者人ようてぶ
めーしのこれにのりをとう人丈ぜいまどきとわてゆかぐーしか
せんく女房のげんぶんまでうーいそんかだるかるゆんさせることん
うれんくよ「おんとうのぞんわるーとうやーわんゆうてもめろーとうと

去れんくけーるや男ぐーてわんくもれぐ一生めろーとうの男ぐう。やりる
ゆんやーうれんくぞうてとゆうまぐ紙めうぬをやーてもめろーるる
とーとるいんーふうぐんいうふうるんがめりわいあい岩立ようりて。
まぐ女房とゆうさるんくつまるるれ「とれおかとうん」ぬーがきめろーく
ぐさるめろーとうの男ぐうとゆうゆめさせやしてんかどぐーるやを。ハテ
まぐこんやいめろーとうとうさせるとうてサ。わをでゆとうろーしまろ
ちゆりゆせ。まのくもまんいさるんもんくんゆるぐいーいトいんを女ぐーん
ゆうくるつるさく」て。「ゆうとうとおやうゆきうぐーりまとーと。一礼を
のぐーと立めるる「めろーとうふうるーて男へ。んゆおんゆろーんーいんぐーの
男ぐうのとーーとんぐうまーいあいきれきーけーーゆんーとくーてーぐ

あがりかぶと

糸のやハ
清はに貫とそ
甲なれ

仙花

「此ちまのちぶろーきがわるー
ちのはいーき勇ぶりーぐ一けんに二ロるのの人ちうちがまと
其かりぐーよちまろーう一口ぼーーるうくかんーてんでせん「ぶんぞ
そそでふーんときてかーるあちふるろてりーのてく
いがぐにちとわんドがわりだ

いかぼま

稲妻や　其角

きのふハ
ひがし
ハふ
ー

「かちをちろのそする
いるぐまいちそそそ
あらふがまがまが
ゆうにかう
ゆびのちぶうに
まがるのがー
ゆーーうのぐ
ちちちと
もくーーうた
ーてに
まげてんせーして
ちぜんとんちのー
ーーちゆびぐよ

さらてやうどもむきとまてつきで〜て。用紙ひうせ。紙とぐらうた。
そ〜のようひどせ死とんでぞりう「そてそて。そ〜〜〜とわうと
れ〜ゆうで

○翡翠鷺と物語

かいせきあ〜のよ
しまのイひうと「ぎんとあれが者いとうぞ。ぞんをてを江角よ
切めくと。て親物ごゞナ。どうまやらうと蘭愛をかせぶどらるまい。
トのひぎ〜「鶏めいことどいかうゆやうぶぞらうとひうて老死を藻の
ぶとのぞて「鶏めいことどいかうゆやうぶぞ。獺をひうひれると。二三尺
あ〜かんとる。ぎびあ〜のろいやうぶ。獺をひうひれると。二三尺
ぶぐあうぶとる。どんもく〜ぎよさいめるいやうぶ〜トいてゆうらうよ
むうみのきーしを
ぎ〜さんぶどりくと「かいせき「どうて。鷺どの獺があうゆをとう「さぶ
あるのとる

「ぎうぶうさ。さうう〜てうらぶあるのいて長ゆをがぶれもぞを一ひき
とりやせん。さぎがどぶゆをうといひゆをとが。今ど死のどぶゆをんかーとく
あうて。どうのあ〜むどうてゆるか。かうく見かくうとうちやア
れ〜のさ。モウさぎまをぶあうりゆ一ま「うせき「そそのみ。あ〜ぶどうん
見でぶんであうぶか。獺をあうふとやうさん。そうちふうきのうそ。う
う神うんそとるのどうう。ぶれうちハあう神のさ。んかうちやアあうく。
うふせきで女ぶるんをぶぐられ〜ぶりふぶどうきーぶんゆをうぶれく。
うふせきん川でそるのさ

○稲光雷よ異見

いなびかり。ぴうく。ぴうくとうちうひうそ。雷よひうられ雷そ

ナントきさまハ、ものしらずとゝ様ゆゑ、ものゝ
いやがるとゝ様をるのんじやアねへ。きれ人なりのゝひとをやはり神のまと
なるてこいやがるぜ。そんぢやうぢ神とのゝて。人ぐきさまとがうきに神ぐ
とゝのてこそ。天神さまのおれぢやア。ふきんのんぎやうゝゝがるこゝろ
さるノウ。めいまくおりのハもれぢよ。ひたまぢやうぢとしてきん
いゝて耳とふきゝハでもれまでとんぐきこぢがる。おれがこうのこゝハらゝれゝ。
きんでもきゝちやんかよ。ハテきこぢふゝ。十日ユ一へんてゐだろうかして。
かかわゝのきふゆゝんでさんゐれだ。きさまのかゝをひぢやアれゝ。
ゐるとんゝきゝつゝしゝく一れんとゐる。きれゝへとゝかゝこうゐぢこびずて
いてゐるとゝぢり神とつけるゝゝ。ぐきぢア人がかきくきゐうと

いゝのゝ。ソリヤアのゝこゝぢゐかきくきるやアあゝぢがゝてんきれゝ。
わんのこゝこぢ代いるびゝうぶがゝてんきゐ神ぜ一えんとゐる。きゝらゝ人かゝら
ゝてこだゝうつゝきゐてゝれゝこゝのゝ。サアそんぢうゝいてかゝえんのかくれる
こゝれ人のゝ代ゝゝこぢがる。ゝてゝ代ゝゝんでえんおゐるんぢと。今ゐ年ゐ年や。
きゐゝきゐふゝゝくゐてる。ワるいゝゐあえんぢゝ代ゝゝるゐゝ人のこゝしゐる
きゐるゝゝ。そるやアいてぢ。きぢこれ人のくゝきゝ代ゝるゐゝゝうゝいぜ。
ハテ鬼神に横ゝきゝゝとゝゝこゝ代きゐゝてゐるでゐゝゝゝ。そゐ一ぢやゐ
横ゝきゝゝゝのゝぢきこ人ゝれ一れゐ又いゐぢゝうゝきゝこゝ。いか
ぢきゝこゝゝとやさゝいきゐ。おれぢひゝるのきゐぢぢ。いゝぢきゝきゝゝて
おれぢひゝれぢいねに実ぢいゝるきゝよ。それぢやアおりゝよをきぢおゝきゝか。

蛸子

「あんがつるのゆうにうまれつゝ
とてもがんぶにぞんぜぬこゝろぶんで
ひとりごとのかうありごとをするこゝろわゝを

木魚

「あんがたゞろ〳〵ぶとくかうあり〳〵くつこまれるこゝろ
とくゝかながをれる
とうたるこゝろ
初人

鶴

藏あしぶ裏や
はまぐりの通ひ道　凡兆

「どろこいまろくすると
うでとろぐくぐぞ
ちろ〳〵こそつまうちの
かくごのまんぶ
えんでもかろうれさん
すまそだ
そ一かんぐらいい
いくぬく

日の春と
さすがに鶴の
あゝこかな　其角

それは又幕のだんはおれが引かへると。途中でおとしたものをひろはれる
とつけのござゐまのうらのハなしさうねへ。ぢさが十月に一ぺんづくあめを
ふらせるとハつまされぬ人ぜ「まあやアかんとのある。大臓をそりけんにあるさが
かあふしそ。これらろめだがりふらせそ。あらめへとらよのらぞそもやア「くあれ
ろんござゐさあのでんぶアまりろんがあがんぜ。あれ人とおかんの通ご。あるちや
ねござゐ「ア〜くそんなおれだろりめちろと光りまし。ぴよう〜ぴよう〜

○上り甲の氣わうひ

五月のありかべと丁兒よりこれまでいうなハ「これでうちどお。きき〆つけて
めつてんでるいふ。ハなれものぞろく。きあつりしぜ。これさいあふかう かんまい。
まつかいしとご。たたそんじんハかんりふしてめへさいふ。それをきろしまいのとけくさぎ

おつとちつと。ひろつてれのゆうれむまびつけてくださいぱ。まあとつて
いくと生きるぎが二百で盆盆までおかみさんはかけておくぱ。やぶさりの腕
やさいをせが おどれるぞ。ゴンザ文子どの志るとろんが敷さるぱ。でせきのゆけるでござんのさ。
ハテぞう夏ぬのでげだ敷さろしのじ。げだ敷さるがいらぬ。ゆんせんでまそ
そで。おやアねへがトいちらふいでうち。あげるとつくあのさうとださる水
たまりへまつさうきあふころんで。あがりかぶと敷きげださとらぶどがいのめへ
「アいらへくでい。いいくぱ。それ見さうえあい。おれをとろぶりけあちさぱ。これ
おやアあふ。かうやのかんだんゆまそうまねへ。たかくしい

○木萸と鉦と身上話

木萸てきがねにむかい「きさあくうしゆまし。とあふまろてあまつてやおどりの

小夜風に
ちるとゝ少
蠟燭
の
すゞれ
あぬ
紅の葉
山東京山

蠟燭の流

家猪

奴紙鳶

京傳

まもりがみにかゝられてきさんじのこゝろまである文六千六百ばかりやと
いれて名於古鏡をみたときは一生の徳とおもふのがたのしみ仏だんの
わきにかけて。ひろい世界をせまくくらして。抹香くさいぞうりでかゝ
いきる身のうへなすいわけもそてくぶせん「ですが「そふじやんか。おれが文
昔男とんなしてきうさに朝文の看経よまうてられるのはおそうまんござ。
やうなしのわかうとんだ今の身にふれて。いかにも蚊をおはせなさる。つまるところ
おりんきんのうちにもやれ釜の下の薪があまいの灯心とりに一本へらせ
のと。おかみさんがつかふ小言紙まぜて。もしゞまへ中へすてきおるぞ。小言よ
くどくどしてあちらの方をとらいて。おとうへおとのまるいをすゞうまで
おれとある爺にさらやアがるとぬかしやる。証も老めくのあそうぞ。じいが

そこのところはゆるされだろうでおりやり。そこ家よむ爺があればかり
られて。棺桶のまへにおかれ。夜中まくら念仏よんでおまくつて。人乃
なげきは紙のそのまゝきえ。ゆめのもゆめと迷ひ子にまへかりゝてて。ゆかれ
太鼓といふもよれ夜中とくれてあの死まんだりとしまはせぬよ。きざみ
まんぞくは蒲団のうへに孫ころんでわるく楽が身のうへ朝晩のおくごて
かくくまへいくぐゆるいはむしいかうくきさみがさうしやなしいや。証よ
きうざへこんなにてかれも老まへに。証がてきの身の中だやナア

○鶴千年まんの昔話

うちまうの亭主鶴女房の女鶴にむかうていふには「かまくらの
むかし滝からこうていつまで。いちぢんとんできたな。モウ又六百年ばかり

手長蝦

婆猫

張子の木兎

あらかうんと月日をくらうでれハうゝ女房へさまでさ。そ我
兄弟の夜打もこのごろのやうにたんまと。アノ横原どのゝいらの
ゐる人でめてさ。今に新ぶ赤いるもたん〳〵男房へだらるゝことを
いうさめごの。あの時おの人間ぶ。ふ人まてゆきてゆるんぶ。そんな
ことゝいうて人をワふれさうもあんか。うんとて。てのの池の亀へいつも
ゐるいでゐるいう〳〵女房〳〵されぶ。いろよゝ〳〵ゐまうまゝかうね
〳〵男房〳〵かうゝ。モウ六十人六百にまるらよゝ

○燕子雁ゑ行合古郷の無事と話

春の彼岸のころつでゝ。ことよの國〳〵さんできて。くゝもの
ゐるゝ雁ふ。ゆたゆひこれゝ〳〵雁ぶの。今おうりでぶるゝトゝぶ
〳〵雁がいるふ〳〵ゆれ〳〵つぶのもゝゆいぶ出房。國りとでんこうか
ゐるゝもぶでぶる。ふかうつまやでとりまと。
まゝ人ぶのお伴るもうんゐとぶゆでもゆゝりそゝか。お仕合をか
ゝでぶる〳〵雁されぶ。ゆち縄の紙まゝ。ゆゝの雁ぶさきゝま
ゝでぶ。ゆ通ふゆぶんさうに。打そうゆてゆゝまと。おまゝんがさま
まゆうゆちのゝまりに。ろ焼よるゝねゆうふ形ふまて。ふぶるまと
さんとそぶて。めでさく國ゝゆゝらまれ〳〵ハイ〳〵そんゝ
ゝ年てぶる〳〵〳〵雁〳〵又真年の春の彼岸よゆゝまゝう。
まゝ〳〵

○蛾燭の流日待の噂

椿

うぐひすの
笠
しる
椿哉

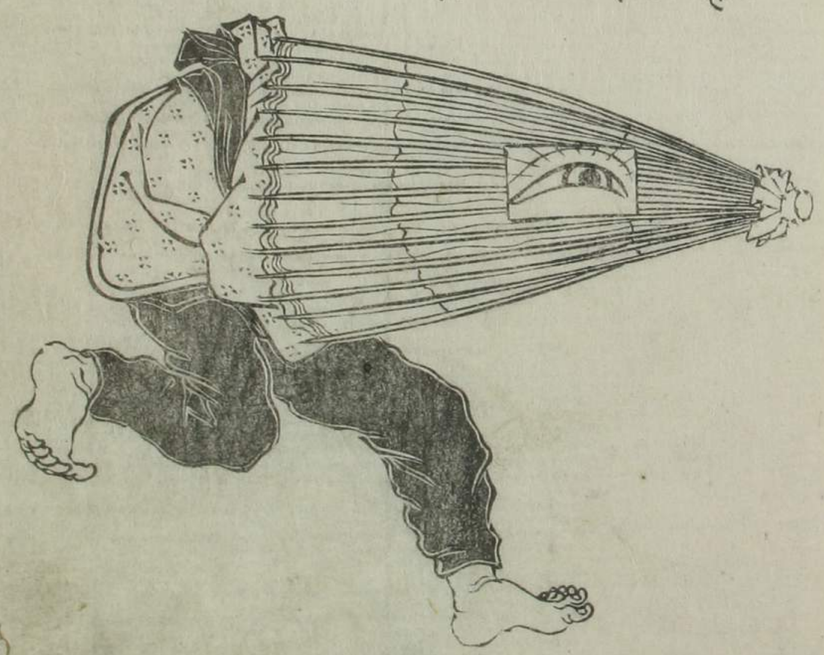
芭蕉

「ちるの葉のうちにてなんぞ
ちいつてまがあらふとちるて
きまろそあらさぐどんがくかろあぐらう
おとしてあるもの」

野猪

初霜や
独り外
芝の
逃
あぐの重

去来



「どれでそこで
つけを
うつて
ぐせく
そのれく
かけどを
いきわひがれく」

日待のわてこわるわる。蝋燭のとりしゝ行。燭奏よそそれなぐ。
陰階まの下におれて　猫言ふ「とゆうべい鼠のあらぬ
こ味線や。似わ人声色とけなて。おわきんこるるろ。そのりれのる
きくあぐ猫ぶことりつて出て。梅ことん〳〵様ハ十ア。いどれ兄ゆ〳〵
とゝくゆくゝゝて。花笠おぐりとゆりおてこぐとみ〳〵びい
ぞろのころぷをかゝゝりとろ。それに又おさくるのひくのころ
えんびあ。おれが心ときりとる。そのうえにわたろるゝとぬゝて。
窓のちゆうでとわけとろこゆえにおれがかろうたろとおじ
とろこれ〳〵ろうそくのおどれろのあふまろて。甚えハ行る
ることぞやゆ。わく人のゆく〳〵ろうそくのあげまん。一す

きまがゆくぐてナア

○奴紙鳶の小児好

「ゆとぐと」「こいろいて風がふのそきこ。サア子ぐるもろ氏わげのせん。
いろる紙まげまいぞ。りりやいてう。わがりまゝぞ。ソレとゆく赤まえとろて
かけかせ人。だのそのうへてこぐるめんぞ。ソレも陰が通るひろかけ
めんぞ。てころきんぐあとろせろかそれ〳〵お師匠さ女の物の真人
ひろかけめ人ぞ。それ又れ人ろくめ。ろてこらろ。へて。いけもろ稲人。
四枚の整ろのてまめがすゝ〳〵ぶ氏ぞそゆるか。名のろまめが
がぐぎにうるる行。おれるまりヤアろれ人グンとく

○家猎軽業の指南を望

家猫猫よむりていのすん「可」も獣喰の仲間でハ。まこうびの
時間ハ毛をうめんされるぶ。ハ性剛まてだりめそハ地をまで
てる毒よされる。汚屋の仕用れとろてで屋とてられて。ブウくと
だりいろて。北びとかいでわくくだりのうでるるいか。なんぞ
商賣とたてどめりくるてハぶ。夏ハ猫のきを。まろのの。
人間ごもりまし氏をてるまるちごよ。もれぶ商賣をそどめると
実て。このごろ四条川原の見せ物浄ぶきて。もれに少わしとらふ
条ってけて。ぶ文ぶてて見せ。ふるでてるいでまでブウくとさん
いんぶりくとふ。ふせりのに出て見れ。ナンノ家猫とつふてと
いられる氣まれくて。ぶんでまれハ一つけさくんまるが。の仲と

ちぶりて見る氣ぶ。これ猫どぶ。のくさうぶんぶ。さうぬハかる
まぶ名人ぶナトもれにちとかるまぶ紙をくくまる氣ハ
れくるいハ。猫ハふくくと吹いぶ〳〵おのりぶそのぶぶてかる
まぶとをるとぶきにぶろうまうてつこちて。鰹の骨をぶんれく。
けぶのりとぶうにちんれトいくた。家猫ぶのみ。〳〵まておちて
けぶをもれた。けふくいて見せのでれくる

○矮狗の口小言

耳のまれは枕ぶのあるおりくん。虻格子の蘭のちちうえ乃
めいぶ〳〵さこむ見ろうとしろふしてあ〳〵ひ袋をりぶ。
ちんのちんとぬてそある。そのそだよちんがねこちんてやそりみん

だが沙奠

烏賊

犬狗

「おくさんのぬくてござるゆへおやくさまがふとんでわらふ。きのふふとんへ祝一ちうべんとおかけうゑ。おれが一生のあやまりざいかいでおまへが湯とあびさせるおきんめがおまへがくびつ玉なつのそばる時珍と。おやゆへ原でひしぎそろていろうふかくゆてこゝ。かけまつるふそうあいがあいどがあのたきこふついてゐる珍とこうけくてこざさんがいてこゝろくそろくおかうどとのてきこんのふおあさんの落ノを出ーて書とそろくといろもゆるだがんざ「とかくもいてハふとる毛のあいだでなれたいろをいでた福くおくがおくきんいるどる元がねんかこんあれをかまいがつーゆるてんけんあのかめのみどるいおまがまあいできねんけるおくきんふざれて花ゐんに出さまた通りの人が見てあのちんかゆりうちいとうゆきあるこの「そのゞんなのぬきがんとそりふとりくうせるあのがつそうあんおれいきういきれんごあのつがつをみるとあくさくゆるそれがーつあのつを又おれをふうんでおくきんのぬきうあゆぬあのでんきせるでおまへがえるがづくとうんせて。そうぬゆりとてゆうる「それふ又とそりのかくもあめがふでうーゆゆうよゆんでゆりゆうとそうて。とれくおくきんとあやまるふきそうてさでる辰るこう。おれとつうめくてをとそれうのおがあのしとうぬがゆうてでるおくゆうれのどみこがきゆぬうてまんそうくというまでるひれとくぬうーとる真毛だがーとひとうれさまも祝くゆまがあのうくゆんにるゆそくいれくがさがとりくゆ出のうがるがゆんぎがうんがど又病のゆるゆのい

れんそうぐ。四百四病のいづれにか。ちんかどつていのこういく

○張子の木兎張子の達磨と法問

ちりこの木兎。ちりこの達磨よむかつていはく「某作者よりうろう。一問答つかまつらん。汝と我ともちあそび戯ふのるこゝに。汝も我も目の玉なし。我い昼目ぶれえざれば。目の玉なきもあれども。汝いとうにも。だるまの目をわくでありてさきうごといえまあづ。我ともんなーゆうに目の玉なしこれいん「だるまこうていはく「目の玉あるとだがんぶうこゝろそふるのくりとろう。目のうるなれだわうしきにちるるり。本来我直指の法い目かくして見るいんぞ目の玉なをうまんや「ゝゝづ又問「汝人はおやがり

小法師とうられてころんでいあれこゝろるこれつまうるれこゝろんでいあれこゝろんでいあれこゝろ。生死流転の道理なり。汝元来兎のごく耳なーとゝいへる。餅をつくもぐまもぐ。小鳥のふるふるぶるまてざまろてゆるんこゝろいん「こゝづこうていはく「我小鳥はなぶるまてざまろてゆるん。堪忍を守るなり。汝九年面壁して。尻のうこゝろとうざるん愚なるぐやこゝいん「だるまこうていはく「蛍いまりの光るふろて身を焦し。栄螺い尻のめづきにろうく勉はるるぐ。ひろまるやゝまい尻のうやきにろて土瓶ようもいそぐーく。猿い尻のまろうるれろて牛房とやそまつけろを

いろまる。なぬかの尻がある由に。出痔まいぼ痔まるづら
ゑもぞや〳〵ぐ又問〳〵それいそれにまてあるふが汝い大徳乃
祖師ゑり。我い無徳の鳥類ゑれども。あんゑ世ゑりとゑと
ゑり。疱瘡掃にゑうんで居きだ。汝ぶ九年のきんがうま。
我あんうんとゑうせーも。ゑうまべゑうで谷川のゑゑ辻堂
地蔵堂紙ゑづ竈ゑ身をたてまこと。こまいん〳〵ぶるゑゑうてゑうく
〳〵汝と我とかうゑ紙ゑうぶるゑうなれども。汝いこうんでゑきることを
ちうぞ。是死物ゑり我いこうんでゑきるこゑ紙ちる。是活物ゑり
死活の道理をちうざるや〳〵ぐいうく〳〵ゑるわどく。達磨さん。
わやまりまーと。へいうう〳〵

○手長蝦の年寄形氣

ゑきゑびへのぼりふるうて。松藻のゑゑふかくまうてゆかぐう
ひとり言〳〵てエ。ぞぶのゑぶのゑうぎにぴうくしてゆるのゑゑうぞで
ゑうぶゑ。ゑぐうゑ飯つぶとせーゆゑうとゑうて。うりぐりゑかるうゑうの
わぶるいゑ紙ちうとゑゑ。ゑぶんさゑうれに水ゑうでゑるゑうてゑれば
いてにゑうのゑうゑいわとゑゑとちうれんぞ。そこへきさのゑゑうぷんどゑ
孤人ゑで人ぶうるてんてきゑゑ。ぞぐしゑくゑうをゑ〳〵ちうぷん〳〵きゑうく
ゑるゑゑ。ゑれぐ樋の口の水ゑうぐうゑうてゑうてゑりちぐう。うう
りとゑうゑいでゑゑう。慈姑ゑりゑゑゑが見うりて。蓋がゑるとゑゑ
て。ぞんぐふうゑゑうとゑゑ〳〵そゑうゑゑゑわくゑぞゑうぶ。

こんさいかつぎにてわらとりてそのうの弟のいんぎょ。用心やま。
ちゃうそのうの人。朝がぶ〳〵あるいでるとの。あびがこゑかけ「そけく
きさナア。ふかーじゃアれ人。ぐ人ぶひろくもるか。トいと「あかいのあ
もサちゃうとごゑにちさよ

○庭椿の獨言

まぐ餘きぐつ〳〵。ゆびのゆうかでんでゆるが上かんぐつぐ。
ものぐらのもと。ゆびつぐきぐおぐ〳〵安くもとるが。おのーじゃぶでも
庭つできのゆびあれば。庭木もどぐぜんぐ「ゆアっとうの庵主
めぐのけもちれ人。てきゑかりて獅子頭ひ林ぐまうとが。
垣根はあれが枝を折ぐいぐ「これい又蛇めぐきとって。あれが

わさまでひる稲をちとるそそぐ。おりし蝶よさまるけはしく。
今朝當にわさまゑゆまれて。ちとびゑ痛けぐ「とそおちるる。
そ〳〵じとちるあーとあ。ひうき目のあるゑ人がうろうと一つちゃれく
けつもやアひうさてれ人。おきゆくのちそうにゆりやがうろ。ぐうく
これで殺ゆうちゆうこぶれ人

○野猪味噌をわげる　口繪
○ぐび　鯊釣人を嘲る
○烏賊章魚と問答

いうさことんまぐゆてゆでゆひ。いうのいうゆ人「これさこ。おのーい
前編よ出さんさが。いうさいおのーとうあれがかうが伝がいてぜ。ゆぜ。と

いれいのかりといろちやア。雲井まそのかる位ゐかるを「こそだゐ
こそいとのあ上方でこそいとのかりこそかぶあるまでこそこそいこと。
元へのかる位のあるのこもれがかりざく「いう「それでもおのへ猟師よ
ざまれてこびのあるくそひこんで。出ることをきつれくいちをづれく
おやアれくこあつア猟師よあんこと。をこ成吹てわとをてつまを。
術とあつてあるを「こ「あんがそこいろてる。間くあがこと革を
あるこそそてきこあるあく「いう「これあれが位のいてきうこ和を
かんちんをるこそ。いここあさうころてこりあこさあをつけるこことあく
さあのつのこたあーがれく「こ「さあのつくのをそんあふをまんをるよ
人とざあをこそいここあかけるここんば。あんまりああここをれく「いう

「それであるあつアこるあるこても。向おの蔵よのせつまて。嫁入よ
つこれる人「こ「あまを絵馬よかてまるこ。茶師さあのお堂の
こここんなそ。人よあるあ川る人「いう「ひかがいとれるがれわしを
こあここだるかここがこたこ「それであるいうのきんさあなどを。安くへ
いうまれ人人「いう「てんうひがのやくまんがのこ。そんかいこあうん
あつがかうこそ神人人「こ「さてこふあんがくいを。「こ」い名くあい
まいがあ「う「本の目あいこいうきか味ハあうまいがあ「こ「さんこよ
がかうあのこるあのつけあこもがひさあこよ「いう「革こいうこよ
こくさまるこんがきひがこ「こ「いうあのがひここ大がこあのこさこ
ここがここあるこんがこあるこ「いう「ここ「干がこあがここあここ

いられるがうさしめ「ぢと」「ぢハ」ぢとつくと甲らをけぞろく。鬱よ
ちるぞよ「いっ」「そよぬ」ちぞ。ちらぢ〜とゐいぢんびかちそよ
ちるぞよ「ぢと」「ぢいるやらわ」「いっ」「ひ」ぢぞうぢぞわ。ト ぢひにわ〜そふ
とう〜。おるぢ〜がとんとうちかりて。双方人の仇まけう。水ひろんと
いちぢ〜。これちうんぢまりくるとうや

○石の高麗狗とんぢ語　ぢのひぢき逆て四掛ちまわ〜ちぢ

○鰻鮒鱸鯰大がけ合

「うなぎ」「ぢれ」にもきぢ〜ひぢあるのぢが。まづおれがきぢ〜ひみのぢさん
ちよよ。おれハさんちよの匂ひとかぐと身がちぢむよ。どふぞも〜ぢ
身のうんとあるぢ〜にゆぢろてちぢ人のぢ。鮒ちうんぢきぢ〜ひが

あるう「ふか」「あるとも」く。おれハまづこぢぶきぢ〜ひのぢ。そ〜てかみあ〜ぢ
きぢ〜ひぢ「うなぎ」「どちやう」ちうんぢきぢ〜ひぢあるう「ふどちやう」ちと。ぢ
きぢ〜ひぢ「ぢうサ」。おれハあのさがぢ〜ぢうとえるとぢきれ目をを
まちぢとよ。それふつのてちちぢ〜ぢあるうんかきのそんぢせんぢ。ハ「ひ」ぢぢ
蒸蒸屋の店のちるのあるふあちさぢ。伸るのあ〜ハあきれまろ〜ぢ。
水のうて出ちりひろこんぢりちぢ。あるぢ紙ふのてあちんでかちさぢ。ぢ〜ア
あるはけちぢのあるで往生とかぢ紙きぢあ。ぢ極んぢぢうぢりして。
ちちとち金紙のびちうと。たるのちぢふちちうてあちさぢ。ちあるせと
ち妻ちうひふかられて。ぢう特かられらまぢ。ちぢの鬼ハいちぢ。ちびく
産ち義をちとあちさぢ。これぢハゆぢてちるきれぢあちう。まづ鶏の地獄い

のゞれさうまつやと病んでわと形がわるい日おう秋のるふいなのてわまを。
わるいのるまつるのが女房にいふ。今度のるまつとまつふとのふアノ
どぢやうもいてれくろ。酒飯又今うて味噌ととろて待てわやと。
さーろ牛房いわてさんぢごとぬりしをる。さてへおれと汁よをるムろ
はまるいやちめごとそてようちふわるでめぢちいさいとろてりのるく物き茶
入て。おちて出ようけとろさが。ほ又町やくとむしてふうーく人ぢ来て。丁どやきやん。
これいくよいぬでお見ふかりいと。今見ハも密のおとのぢ。よづまぢ
やめふるて。踊にるうまーさそのおとろりにまわるとろ。こでお目
ふかりろさハ幸ひくとりいとそてこて立かるるまつ来めハひとりふるよ。
だらくしいそんるうそれとたやくやめふちをれぢり。おどりにおつまを

見くるといいくまーいいろものとこれうーいどこぞくなどれてるまう。ろろ
ちの踊るまりふおやまのめぢとやつれてーさろふとろくりのまくおれを
川へなげこんでどうちくうやれそろさ。ろっけの幸ひで。おれいあやうの命を
たもろんとさが。つひてくんやどつんてさまつ来のどぢやうと差てくりふとろん。
ホンニまわ。裂とわろでんぢーぬり。トたるーしのうちよるまづがいろとうーるて
へるまぢとぞそんるふるてくんてふげるトろぢ〳〵こまとろて
川よろうもれげきーひのひやうさんぢ〳〵

文化七年庚
午八月稿成

逢夢石三編大尾　山東京傳戯作　歌川豐國戯畫

△腹筋逢夢石初編　去巳年出来
△同二編　共ニ全一冊ヅヽ　尚午歳出来　奥出来中ノ

二編目録左のごとし

○男雛女雛の夫婦いさかい
○太張子昔語
○風の長家見舞
○蛇乃用女つきあい
○ちゑさい鮫素鮫よ笑見
○猿猴の口三味線
○鋪眼鬼のもしもし
○杜味噌の熟立身振
○玄咲の梅ヒ小言
○蟻くの朝きゝん
○鶯の夫婦ぐち
○鶴うのぎと罠
○孔雀の述懐
○ちゝ火鉢の冬籠
○似象蜂暮おとしてむ
○ゆゞ蚊昔のあふわふぞふ数の生碎

通計十六扮目録終

○腹筋逢夢石四編　近刻

○逢夢石餘與座敷藝忠臣藏　京傳作　豊國画

一　初版のかろかやうをひ紀ざるの月ぶり
一　同ちんやちんぐちんちゝづくの沙ぶりおてかんにん
一　同ゆぶとわゝなのかやよちゝろちゝちよとこれをちうゆゝての月ぶり
一　同切りの井かもの月ぶり
一　同　かろかやとんびの月ぶり
一　二ぶん目カ糸小ゐゝとうつぎのにぶくくのけいこの月ぶり
一　同りの井かりりの月ぶり
一　同松きりのかゑこゐをまゝをゝ月ぶり
一　三ゝ目りゝの井ゆゝうかりりの月ぶり
一　同かろかや目ゆゞゝとかけうる月ぶり
一　同ちんやちんぐちんかろかやとさゞひにひうゝ紙をうてゐたおとをうぶり
一　同切動平作問のたそさゞをまゐの月ぶり
一　ぼゞん目ちんぐちんちゝきりそゞばの大ぐひ
一　同かわゝよせゝの月ぶりまそはしゝらにとりつきるげき
一　同かけつけのゆゝの助ひさゞいるの月ぶり

一同切りへいのそこのやつの助諸古ふむろてこづまのふがこ多紙のむこぶり
一ゑごん同ざこ五郎こりのもこ五郎ぶこさんゑこて蛸の身ぶり
一同午市こえわるがいの身ぶりゆてちめふこん
一古ごん同勘平こ切たぬきこつこごこの身ぶり
一同身ぶりのあろこきりぐこもの仕ぶりかどたろつきゆ乐
一ちだん同ゆつの助亀の身ぶりすてめんちらちぶり
一同あかる女ねこの身ぶり
一同年ちぶつきぐてんの仕ぶりまてちふこん
一同ゆこを美ここの身ぶりのちに太の身ぶり
一ゑごんめか義ざろこぶりの身ぶり
一同こゑ毛おいーかいちゅうだまこやこうのいひこそこそけい
一同ゆこるこそこぶこしまそこぶの身ぶりちふこん
一同ゆ義ここ切こ毛ひにまりてゑこぶ紙いこーかころのいひこまそ毛ぶり
一同ゆこの勘刀ふかげ衣のぼこまてゆ紙ゆろも
一十だんめ天川屋義平かふの身ぶり
一土ごんめ孫ろちいろくのざーきげい大こも

此外こまろこく作ふこぬきのかくこふいろこ
亀鼈魚出墨水のちあそびめの鼈其外注文げい一ちき無こ年平兵衛
まかり出相つとめかひは本出板仕ゆ兵八出浮判をこくれたゆ出版てこ不ん

臺所道具式口技　鸚鵡八藝臺所譚

右同録　絵入讀本全一冊

山東京山作
歌川國貞画

●釜茶釜搭椀問答●やろくの独云●もりこ木もろだちぶふふ
いきかひ●やくまんの身のうんどかしー●せろくいの迷惑●薪の身の
うんそかーー●茶びつのこと●わきまえくーーわづりこのいさろひ
●ちゆえかこにのいさろひ●へろ注いもちるまんにいろん●ゆもけつる屋の
わろころ●こそこーもこのろ紙ろーーやむ●まれゆえふちぶこのこんれい
●わききどろりびんやただ紙わざける●火ちだこの身のうんだ色
●ちゆろがきこどがうきまがうきこふかけ合●かふごこんちゆづ
ごこひ紙わこんむ●茶代の迷惑●ふきんどうきこんのわこそひ
●そーーだこのひとりごと●どびんちゆこんのんどう●めーつぎ
米かーーもけ紙まちん●こまこもどんこ名毛所屋奥一或ゆ
故人二十三物　来れ未平四月元日もろ本臺出ーゆく

逢夢石餘奥

山東京傳作

坐敷藝忠臣藏

歌川豊國画

そもそも逢夢石の書けるものの紙むしの月ぶりにいろくのざくきけいを用ゐてたいしんぐらに見えたる十一ぶんつづきの絵入こゝろ本なり業未の正月元日より

本屋出しゆく

京傳店商物

讀書尤

一つとをもあるなり○世人きそんをたくしく物業紙うそをつかしまを紙人用て紙屋紙あるなり

大極上品きもう丸

大人小児男女病こは大極上の業極をたゝうひ家傳のかゝ味ありてゆるのきもう丸とゝこのうめくべうくの極上のそれぞれ京傳自画さんあるきさんざくそうまを絵のるの志かぐ

きをるさまと又志んがゝ

志ゐるくめづらしき見流の雅ふ業しゝ

京山てんとく

水晶銅下吉てい迫てい

はゐる業ものかい志しきのわり仕る

京傳店てゝ出版

文化七年庚午秋発行

江戸小舟町二丁目仲之橋通

地本問屋　文亀堂　伊賀屋勘右衛門板